

第1節 職場の美女達とのエッチ（第2話 出張先での再会）より抜粋

そのまま二人は床に横になり、お互いの服を脱ぎ、性感帯を刺激し合う。

彼女が私の首筋にキスをする。

そして乳首、お腹へと彼女の唇と舌が私の全身を舐め回す。

そして私のジュニアに優しくキスをし、柔らかな唇でジュニアの頭部を優しく刺激する。

ジュニアが彼女の口の奥へと入り込むと、彼女は少し苦しそうな表情をながらも、優しくジュニアを慰めてくれる。

私のジュニアは、彼女の小さな口中でさらに膨張し、彼女の口の中に収まりきれずに口の外へと飛び出した。

すると彼女は飛び出したジュニアを滑らかな舌で舐め回す。

年上の彼女は昔から積極的に私をリードしてくれていた。

それは今も変わらず、かなり積極的に私の性感帯を刺激してくる。

私は全てを彼女に任せ、しばらく彼女の唇と舌の感触を楽しんだ。

彼女は、唾液で包まれたジュニアをふくよかな胸に挟み込み、滑らかにジュニアを刺激する。

私は彼女の頭に手を回し、再び濃厚なキスをおねだりする。

濃厚に舌と舌を絡みあわせていると、私のジュニアは彼女のあそこに触れ、彼女のあそこを焦らしはじめた。

彼女のあそこからは愛蜜が溢れ出し、愛蜜がジュニアを包み込む。

すると、我慢できなくなった彼女は起き上がり、ジュニアをあそこへと入れようとする。

私は「ちょっと待って!」と彼女を止めた。

「このままナマで挿入してしまい、万が一妊娠でもしたら責任が取れない。幸せな家庭が崩壊する」

あまりの快楽により理性を失っていた私だが、さすがにこのままではまずいと思った。

私は一旦起き上がり、彼女に「コンドーム付けよう」と言った。

すると彼女は「だめ。このままでやりたい。あなたのミルクがたくさんほしい…」と泣きそうな声でささやく。

「それにコンドームないもん」と言い、彼女は強引にジュニアを挿入させてしまった。

彼女のあそこの中はとても暖かく、溢れ出す愛蜜が私のジュニアを優しく包み込む。

彼女は腰を振るたびに「あーん」と可愛らしく声を上げ、トロンとした瞳で私を見つめる。

彼女が腰を振るたび、あそこから愛蜜が溢れ出し、私の下半身を濡らしていく。

愛蜜にまみれた2人の下半身はヌルヌルと滑らかに滑り、チャブチャブといやらしく音を立てだす。

彼女の腰の動きが激しくなるにつれ、彼女はだんだんと汗ばんでくる。

彼女が髪をかきあげると、彼女の汗が私に飛び散ってくる。

彼女は唾液を私の胸元にたらし、柔らかな手で私の乳首を刺激する。

ヌルヌルとした唾液の感触と、彼女のいやらしい指使いがたまらない。

すると、彼女はさらに激しく腰を動かし、ジュニアを刺激してくる。

溢れ出す愛蜜と吸い付くようなあそこの感触。

そしてときよりジュニアを強く締め付けてくる。

私は彼女のふくよかな胸に手を回し、優しくもみほぐす。

ときより、彼女の乳首を軽くつまむと、彼女は敏感に反応し、「あぁーん…いいーん…」と声を上げる。

久しぶりのナマでのエッチ。

私のジュニアと愛蜜で潤った彼女の柔らかなあそこが直接触れ合い、激しく擦れ合う。

彼女のあそこの感触が直接ジュニアに伝わってくる。

溢れ出す愛蜜もジュニアを直接包み込む。

やっぱりナマは最高だ!

ナマでの感覚をもっと味わいたくなった私は、彼女の腰を強く抱き、ジュニアであそこの奥を強く突く。

彼女は悲鳴のような声で「いやーん」と叫ぶ。

そして彼女はジュニアをきつく締め付けながら、私に濃厚なキスを求めてくる。

彼女の唾液が私の口の中に流れ込み、それを私は彼女の口の中に優しく返す。

2人の唾液は濃厚に混じり合い、彼女の口から溢れ出した唾液は、私の胸元にこぼれる。

それを彼女は優しくすすりながら、滑らかな舌で私の乳首を刺激する。

ジュニアと乳首、一度に両方を攻められた私は、快樂の絶頂に達し、ナマで挿入していることを忘れていた。

そして、彼女はあそこをきつく締め付けながら、激しく腰を振り続ける。

限界に達したジュニアは、彼女のあそこの中で最大限に膨張し、彼女の中で大量のミルクを放出してしまった。

その時、私の中で何かが吹っ切れた感じがした。

「もう手遅れだ。なるようになれ!」と。

私は、彼女の中にジュニアを入れたまま起き上がり、彼女に激しくキスをした。

彼女の中で愛蜜とミルクが絡み合い、彼女のあそこの中はさらに滑らかになっていく。

そして、お互いの腰は激しく動き合い、舌と舌は濃厚に絡み合う。

私は、我を忘れて、激しく腰を動かした。

私のジュニアは激しく彼女のあそこを突きまくる。

そのたびに、彼女悲鳴のような声を上げる。

彼女は私の腕を強く握りしめ、激しいジュニアの突きを我慢している様にも思えた。

しかし、私は、さらに激しく、彼女のあそこをジュニアで突きまくる。
そして私は彼女の中で2回目のミルクを放出した。

彼女のあそこからジュニアを抜くと、大量のミルクが溢れ出してきた。
少し冷静さを取り戻した私は、彼女のあそこから溢れ出した大量のミルクを優しくティッシュで拭いてあげると、彼女は私のジュニアをとろける様な唇と舌で舐め回してくれた。
チャプチャプといやらしい音をたてながら、彼女の口は私のジュニアを飲み込んでいく。
あまりの心地よさにジュニアもだんだんと復活しはじめ、再び彼女のあそこを求めだした。

すると彼女は私の手を取り、バスルームへと私を連れて行く。
そしてバスルームでセカンドステージが始まった。

続きは本編をお楽しみください！